琉球大学学術リポジトリ

［特別寄稿］福建師範大学における日本語教育　-日本語専攻の伝統と変革を中心に-

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学留学生センター
	公開日: 2009-04-06
	キーワード (Ja): 福建師範大学, 日本語教育, 語学能力, カリキュラム
	キーワード (En):
	作成者: 林, 璋, Lin, Zhang
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9531

琉球大学留学生センター紀要
留学生教育　第6号，2009

福建師範大学における日本語教育
—日本語専攻の伝統と変革を中心に—

林　璋

要　旨

本文は中国福建師範大学における日本語教育の現状と今後の変革の方向を紹介するものである。これまでの日本語教育は中国における外国語教育の縮図と見ることができ，語学能力の向上だけを目標とし，しかも読み書きの練習が中心であった。これからの変革の方向としては，学習者の「聞く，話す，読む，書く」の語学能力を偏りなく向上させ，その上で専門的知識をも学べるようにカリキュラムを編成する方針である。

キーワード：福建師範大学　日本語教育　語学能力　カリキュラム

1. 日本語学部の現状

1.1 日本語専攻の歴史と現状

福建師範大学は百年の歴史を持つ大学で，1907年に清の末代皇帝の師匠にあたる陳宝琛氏が創立した福建優級師範学堂を前身としている。建国後，華南女子文理学院，福建協和大学，福建省立師範専科学校などによる調整・合併を経て，1953年に福建師範学院として成立し，1972年に福建師範大学と改名された。

福建師範大学外国語学院の外国語専攻の前身は，福建優級師範学堂英文科と日文科，また1908年に創立された華南女子文理学院英語科と1915年に創立された私立の福建協和大学外国語科に遡ることができる。日本語学科は，1972年に再スタートし，現在では年に二クラス合計50名の日本語専攻の学生を募集する。その外，福建師範大学の協和学院は，2003年創立当初から日本語専攻の学生を募集し，現在在籍している日本語専攻の学生は260余名いる。

1.2 日本語教育の形態

福建師範大学で実施されている日本語教育は，次のような形態がある。

	専攻	非専攻
学歴教育	日本語専攻	第二外国語
非学歴教育	生涯教育	第二外国語，各種日本語教室

具体的に言えば，学歴教育の方では，日本語専攻は四年制で，学生は全国統一入学試験を通して入学したものである。そのほか，大学院の修士コースもある。第二外国語は，英語専攻の学部生や大学院生を対象とする。

非学歴教育の方では，専攻の場合の生涯教育は，「大学卒業資格認定試験」を受ける社会人のためのコースである。「大学卒業資格認定試験」は，国が全日制の大学で勉強できない人たちのために設けたシステムで，指定した試験科目をパスした学習者は大学卒と同等の資格を認められる。本学では，このような学習者がより短い時間で試験にパスするように，全日制のコースを設けて学歴教育の場合の日本語専攻とほぼ同じように日本語教育を行う。

2. 実用主義の伝統

2.1 中国における外国語教育の伝統

中国では，ネーティブスピーカー並みの語学力を身につけさせることを目標に据えることは，外国語教育全般について言える。つまり，ネーティブスピーカー並みの「聞く，話す，読む，書く」の力を身につけさせるのである。その上，将来外国語で仕事をするのだから，翻訳と通訳の能力の養成も重要な教育内容となる。

戴炜栋（2001）は，外国語学習の真の目的は交流にあるという言葉の道具的属性を強調した。しかし，一口で交流と言っても，さまざまな形がある。従来は読み書きの交流が強調され，口頭によるコミュニケーションが重視されなかった。改革開放後は，口頭による交流の必要性が高まるにつれて，口語の能力が強調されるようになった。このような背景のもとで，福建師範大学の日本語教育も，同じような道を歩んできた。

2.2 教育環境とカリキュラム

中国で外国語教育としての日本語教育を行うのだから，不利な点として何よりもまず外部の環境に恵まれないことが挙げられる。その言葉の使われる環境がないため，学習者はその言語が実際に使用されている場面に出会うことはほとんどない。日常生活で言葉を使う必要に迫られることがないために，言葉を勉強する原動力は学習者の興味や意志力などに求めることになる。

このような環境の下では，教育者にできることはネーティブスピーカーの言語能力を分解して，「聞く，話す，読む，書く」のように，項目別に訓練するしかない。だから，従来の日本語教育でよく見られるカリキュラムには，言葉の知識全般に関する総合的な科目「精読」や，読む量を増やすための「読解」，聞く能力を伸ばすための「聴解」，話す力をつけるための「会話」，日本語の表現力を高めるための「作文」，日本に関する知識を教える「日本事情」，日本語文法などの科目がある。たまに「語彙論」といったような科目も見られるが，学問としての「語彙論」には程遠い内容である。端的に言えば日本語を運用する力を身につけさせることを目的とする教育である。この点，福建師範大学も例外ではない。

ここ何年，教育改革の一環として単位数と授業時間数を減らそうという大学の方針があり，単位数と授業時間数の上限が設けられている。大学生だからもっと自分の興味や長所を伸ばすべきで，そのための読書の時間を確保すべきだという考えである。高等教育からすれば，しかるべき対策だと思われるが，日本語教育からすれば，利用できる時間が減少したことと，運用能力の訓練効果を維持しようとするため，カリキュラム上実用主義に走る傾向がさらに目立つようになる。

3. 日本語教育の変革

3.1 変革の目標

社会のニーズの多様化に応えていくためには，日本語専攻の卒業生が日本語という道具しか使えない現状を変える必要がある。外国語専攻の卒業生は「専門がない」と言われてきた。変革の方向として，大学を卒業する時点で，日本語をマスターする以外に，専門的な知識も分かるようにしたい。

現在，日本語専攻の卒業生の卒業後の進路は，大雑把に言えば二つに分けられる。一つは実務関係の就職口で，もう一つは研究系で，大学院に進学する。このような状況に対応するには，応用系と研究系に分けてカリキュラムを編成することが必要

となる。方向としては，大学４年間を低学年２年と高学年２年に分ける。低学年においては，日本語の「聞く，話す，読む，書く」の訓練を強化し，その語学力をもって高学年の専門の勉強に臨むようにする方針である。

3.2　与えられた条件

福建師範大学は，次のような状況で日本語教育を行っている。

(1) 目標言語，つまり日本語の環境がない。

(2) 学習者は成人である。

(3) 教師の大部分はネーティブスピーカーではない。

(4) 学習期間に制限がある。

(5) 日本語教育の利用できる授業時間数が少ない。

日本語の環境がないため，学習者には目に見える必要性，即ち日常生活のための必要性がない。学習の動機は観念的な必要性に求めなければならない。学習者が成人であるため，言葉を習う最もよい時期を過ぎていることを意味する。言葉を感性で覚える時期を過ぎているため，理性で学習するほかに方法がない。中国で日本語教育を実施しているため，教師の大部分はネーティブスピーカーではない。ネーティブスピーカーではないために，教師自身でも言葉遣いの正誤・適否の判断に迷う場合が多い。大学に入ってから日本語の勉強を始める学習者を，大学を卒業する時点で一人前に仕事ができるようにしなければならない。利用できる時間は四年間である。

四年間は決して短い時間とは言えないが，この四年間のうちに日本語教育に用いられる授業時間数が少ない。現在のカリキュラムでは，162単位からなっているが，日本語の授業に利用可能な単位数は86単位である。平均すれば，年に21.5単位で，一学期は10.75単位となる。１単位に対応する授業時間数とは，大雑把に言えば，学期単位で週に一つの講時を受ければ，１単位取得する。一つの講時は45分間である。平均的に言えば，一学期は18週からなる。したがって，週に利用できる授業時間数は，平均して約８時間である。

3.3　カリキュラムの調整

3.2で述べたような状況のもとで，3.1で立てた目標を達成するには，語学教育の効率を向上させなければならない。高学年で実施する専門的知識の学習のためには，

低学年で相当の程度まで語学力を身につけさせる必要がある。これまで，このような目標を目指して，中継ぎの段階として，次のようにカリキュラムを調整した。

(6) 低学年の科目：総合日本語，聴解と会話，読解とディスカッション，読解と作文，日本事情

(7) 高学年の科目：文法，文学作品講読と作文，新聞講読とディスカッション，実用文の書き方，翻訳，通訳，貿易日本語，日本文学史，日本語概論，日本古典文法

以上は2007年度生用のカリキュラムの概要で，そのうち，総合日本語と聴解と会話は高学年まで続く。このカリキュラムは，全体的に言えば，語学能力の訓練の効率を高めるためのものである。第2学年が終わった段階で，その実績を評価したうえで，専門的知識の勉強の取入れとその方法を具体的に考案する。

3.4　授業内と授業外

日本語教育の効果を向上させるには，大学の四年間を全体として計画する必要があると思われる。このような考えに基づき，授業内の時間と授業外の時間の使い方を一括して考えることが必要となる。

従来，授業内の時間のほとんどは言語知識の説明に使われていた。練習は学習者の自覚に任せられていた。語学能力の向上を目的とする日本語教育としては，効果的な方法とは言えない。現在の外国語教育で提唱されている授業内の時間の使い方は，言語知識の説明を最小限にし，練習を十分にさせるものである。練習にはいろいろな方法があるが，「聞く，話す，読む，書く」の語学能力を確実に向上させるのに最も効果的な方法は，マルチョイスではなく，習ったものを実際に使って書面なり口頭なりで発表させることだと思われる。

授業内の時間は，(i) このように最大限に練習に使うこと，(ii) 練習の方法，ひいて言えば学習ストラテジーを教えるのに使うべきである。外国語のレベルを評価する指標の一つとして，熟練度が挙げられる。その言葉の意味が分かっただけでは，自由に使えなければ，真にマスターしたとは言えないからである。外国語を自由に使うようにするには，大量の練習が必要である。授業内の時間だけではそれはとてもできない。授業外の時間を十分に利用しなければならない。教師の目の前で練習するのではないから，その効果を挙げるには事前の指導が必要となるのであろう。

高学年における専門的な知識も，授業外の時間の使い方とその指導が重要である。

大学における勉強科目の一つとして卒業論文がある。専門的な知識の勉強がほとんどない日本語の学習者にとっては難しい作業である。体系的に専門的知識の勉強ができない状況のもとでは，その補完策として，最後の３学期にわたって正式の授業以外にゼミを開き，指導教師の指導のもとで興味のある分野の知識を勉強するような仕組みを作って対応している。

さらに，自主学習を支援するために日本学サロンを立ち上げたが，これまでにすでに何人かの学生がそのサロンで学習の成果を発表している。

4. 今後の課題

以上述べたように，中国では，いわゆる外国語専攻の学習者は，その言葉を相当の程度まで使いこなせなければ学習者にしても教育者にしても失敗だと見られがちである。このような環境にあっては，語学能力の養成を第一の要務にしなければならない。だが，それだけでは大学教育の理念に合わず，それ以外に専門的知識の勉強が必要である。限られた授業時間数で何ができるか，どうすればよいかは，これからの課題である。また，専門的知識の勉強のために，語学能力の養成の能率をもっと向上しなければならない。そうするには，教材開発が必要不可欠なこととなる。このこともこれから取り組むべき課題である。

参考文献

戴炜栋 2001，构建具有中国特色的英语教学“一条龙”体系，《外语教学与研究》5：322-327

李晓霞2000，外语教学模式与外语人才素质培养，《洛阳大学学报》3：79-80

（福建師範大学外国語学院教授）